

Valperga における Mary Shelley の 哲学的社会思想

—歴史的英雄 Castruccio の再評価の視点から—

鈴木 里 奈

Abstract

This paper examines Mary Shelley's historical novel, *Valperga; or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* (1823) and the social revolution adopted in it. Under the influence of her father, William Godwin, a political philosopher, and her husband, the radical Romantic poet, Percy Bysshe Shelley, Mary was consistently concerned with political matters during her life. While she was researching and writing the novel, there were revolutionary uprisings on the Continent against the Vienna system established after the failure of the French Revolution. By understanding the context of the composition of *Valperga*, we can more clearly see how Mary's criticism of reactionary forces in the early nineteenth century was formed, and how her political philosophy was shaped.

The protagonist of *Valperga*, Castruccio, was an actual figure of medieval Italy, the lord of Lucca who had been generally considered a hero in England. Through the reassessment of the background of his career as a successful military leader, however, Mary transforms him from a prince to a tyrant, the very reverse of a hero. By so doing, she presents her own moral standards in the masculine world of power politics. This paper reexamines Mary's view of the contemporary social system, and explores Mary Shelley's political and ethical philosophy, as incorporated in the creation of an anti-hero.

はじめに

Mary Shelley (1797-1851) の小説 *Valperga; or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* (1823) は14世紀ルネサンス期のイタリアを舞台とした歴史小説である。これは *Frankenstein, or the Modern Prometheus* (1818) に続く Mary の2作目の小説であり、1823年に彼女の父親 William Godwin (1756-1836) の手を介して出版された。彼女は1817年からイタリア史・伝記の調査を開始し、この小説の完成には4年を超える年月を費やした。*Frankenstein* によって高い知名度を得た Mary が“(a) child of mighty slow growth” (MWS *Letters* 1: 203) と位置づけたこの小説は出版の翌年までに20を超える論評の対象となったが、初版以降2度にわたり版を重ねた *Frankenstein* とは違い、その後は評論誌から遠ざかっていった。現代批評の中でも *Valperga* は Mary の中心的作品とは見なされておらず、“(its) literary value. . . is negligible” (Grylls 321) というような批評も少なくない。また *Valperga* が Mary の6編の小説の中で唯一増刷されなかった小説であることは事実である (Nitchie 205-6)。しかしながら、この小説は Mary が、19世紀ヨーロッパにおける政治的変革と社会運動の分析を通して、自らの政治思想を描き出そうとする明確な意図の上に書かれたものであるという点で重要な作品と言える。作品全体に敷衍される英国社会革命思想家である父 William Godwin と女性拡張論者であった母 Mary Wollstonecraft (1759-97) の政治的・哲学的思想やロマン派詩人である夫 Percy Bysshe Shelley (1792-1822) の革命思想の影響の中に、彼女自身の政治的視点を見出すことができる。本稿では、Mary が英雄と評される歴史的実在の人物 Castruccio を反英雄的暴君として描いたことに焦点を当て、その英雄の再評価の過程に織り込まれた政治・哲学的思想について考察する。Ⅰ章では、アンチ・ヒーローとしての Castruccio の人格形成に関して、彼を暴君へと導く要因が何であったかについて論じ、Ⅱ章では、彼

の道徳的墮落を裏付けるヒロインを通して見える Mary の社会思想と道徳的価値観について論じる。

I 章

アンチ・ヒーローとしての暴君 Castruccio の人格形成

Valperga の主人公 Castruccio Castracani は14世紀イタリアのトスカナ地方ルッカの實在の君主である。Mary は Castruccio の伝記と事績について多くの歴史文献を研究しており、その人物形成については Niccolò Machiavelli (1469-1527)¹ の *La Vita di Castruccio Castracani da Lucca* (1532) と Simonde de Sismondi (1773-1842)² の大著 *Histoire des Republiques Italiennes de l' Age Moyen* (1807-9, 1818) を主な資料としている³。ここでまず着目しなければならないことは、Mary が Castruccio の事績をまとめた Machiavelli の著作におけるルッカの英雄的存在としての Castruccio 像を否定し、その一方で、彼を「ルッカの暴君」とした Sismondi の共和国史に共感を示していることである。英国では一般に Machiavelli による Castruccio 像が知られており⁴、Mary の Castruccio の扱いは一種の批評的となった。*Blackwood's Magazine* の批評者は “Our chief objection, indeed, may be summed up in one word — Mrs. Shelley has not done justice to the character of Castruccio”⁵ と主張している。Mary は Castruccio の英雄像を壊し、彼を暴君として描いたのであるが、歴史的人物の再考察を通してアンチ・ヒーローを創り出すことに込められた Mary の意図がどのようなものであったかについて、*Valperga* 執筆時の政治的・社会的背景と Mary に影響を与えた Godwin、Percy の社会革命思想を糸口として考察していくことにする。

この物語は、幼い頃の追放の身から武勲を立て、後に冷酷なルッカの君主となる Castruccio の野心的で壮大な生涯を辿る。Castruccio の反英雄像は

Mary の政治思想の2つの要素から形成されている。1つは圧制から人々を解放する英雄的存在から自身が圧制者となった Napoleon に対する批判であり、もう1つは19世紀ウィーン体制下におけるヨーロッパ各国の専制主義政策に対する政治的批判である。これらは Castruccio の反英雄的側面である軍事的野心、武力革命行為、そして反共和的思想の中に投影されている。Castruccio の軍事的野心や思想が形成されていく過程が小説の1巻で詳細に記されているが、ここには Godwin が自身の社会革命思想を著した *Political Justice* (1793, 1798) において提唱した「必然論」(“the doctrine of necessity”) の影響が明確に表れている。人間とは必然の存在であり、自らを取り巻く「環境の産物」とであると Godwin は主張する。“the actions and dispositions of mankind are the offspring of circumstances and events” (*PJ*. I, chap. iv, 97)⁶ とするこの必然論は Castruccio を始め、登場人物たちの人格形成の根底にある思想である。この思想を土台とし、Mary は Castruccio の暴君的資質とそれを導く「環境と出来事」の描写に彼女の社会思想を取り入れていく。

まず、Castruccio が抱く野心、特に軍事的権力を掌握しようとする野心と彼が行う武力革命は Napoleon と容易に結び付けられる。Percy は Charles Ollier に宛てた手紙の中で Castruccio を “a little Napoleon” と呼び、“all the passions and the errors of his antitype” を表象する人物であると説明している (*PBS Letters* 2 : 353-54)。 *Blackwood's Magazine* は “we find Mrs Shelley flinging over the grey surtout and cocked hat of the great captain of France, the blazoned mantle of a fierce *Condottiere of Lucca*” と述べ、“this perpetual drumming at poor Buonaparte” (283) にはうんざりすると非難した。平和を築く英雄となるという民衆の期待を裏切り、武力革命によって征服者となっていく Castruccio の姿には “an hope, an aim (to which) the French revolution first gave new life” を “despotism” (*Lives of the*

Most Eminent Literary and Scientific Men 2 : 367) によって引き裂いてしまった Napoleon に対する際限ない危機感が強く投影されている。

Mary は Castruccio の軍事的野心を反英雄の資質としているが、彼のそうした野心の背景には、彼を取り巻く派閥闘争がある。Valperga では一貫して派閥権力の衝突が重要なテーマとして取り上げられており、これが登場人物の思想の根底に強い影響を及ぼしている。物語の設定はイタリア史上の 2 大党、皇帝党 (the Ghibelline) と教皇党 (the Guelph) 間の政治闘争に置かれ、この派閥闘争が Castruccio の資質を形成するまず第一の「環境」となる。皇帝党と教皇党の派閥闘争で引き裂かれたイタリアで、争いに敗れた皇帝党 Antelminelli 家の子息 Castruccio が両親と共にルッカを追われる場面からこの物語が始まる。あらゆる社会制度と同様、世襲的派閥精神とは生来の人間の精神に偏見を植え付け、その性質を歪めるものであり、Godwin にとって “the evils of political society” (*PJ.* I, chap. iii, 89) の 1 つである。理性絶対主義に立脚し、彼は理性の啓発が本来善の存在である人間を必然的に「完全性」(“Perfectibility”) へと導くと考える。社会制度や世襲的派閥思想は人間の発達過程において彼らに先入観を与え、理性の発動を阻害し、彼らから正しい判断力を奪ってしまう。こうした Godwin の思想を Mary は Castruccio の軍事的野心が表面化するまでの背景に適用している。

幼い頃に Castruccio が目にした派閥闘争と敗者となった仲間たちの悲惨な光景は、まだ無垢な少年に派閥的優位と名声への願望と執着を抱かせる。

Our exiles found many of their townsmen on the same road, on the same sad errand of seeking protection from a foreign state. Little Castruccio saw many of his dearest friends among them; and his young heart, moved by their tears and complaints, became inflamed with rage and desire of vengeance.⁷

ここでは、まだ幼すぎて自分たちの置かれた状況の痛ましい不名誉を完全に理解することのできない子どもたちでも、両親や仲間の不幸を目の当たりにして、迫害者たちに対する復讐の誓いを立てるのである。これが Castruccio の幼少期の経験であり、やがて暴君への道を辿る彼が人生の様々な状況下で行う選択の根幹の動機となるものである。Godwin の言葉を借りれば、Castruccio が幼少期の出来事から受けた一連の印象が、“necessary and universal laws” (*PJ*. IV, chap. vii, 343) に従って彼の今後の人生の選択を導くのである。

派閥抗争の中、敵方の武力によって追放の身に貶められた Castruccio にとって、自らの党派の優位を奪回するための革命は武力によるものであり、ここに彼の強力な軍事的野心が芽生える。革命の混乱に翻弄される人々の前に “nationalism” の絶対的な力を掲げた Napoleon が容易に彼らを軍事行為へと導いたように、Castruccio は “the spirit of party” (*V* 18) のもとに武力行為を指揮するのである。世襲的な派閥意識は自然の秩序の一環として人々に受け入れられ、彼らは必然的に属する党派の優越を望むようになる。そして優位を獲得するために他派を征服しようとする野心が人々の中に覚醒し、軍事革命は最速の征服の手段となるのである。この連鎖が Castruccio の野心を導いたものであり、その根源となる派閥精神に対する Mary の危惧が窺える。

Castruccio の武力革命行為と反共和的思想に対する Mary の批判は、彼の思想の発展を導く人物たちの描写に投影されている。派閥闘争という全体の背景に加え、*Valperga* において Castruccio の人格形成を導くものとして Mary が利用するのが彼の談話者たちである。彼らはいわば昔の道德劇の中の美德・悪徳の役として機能し、彼らが作る “a series of dialectic milestones” (*Walling* 63) の中で Castruccio の完全な人格が形成されていく。

まず美德の体現者として、Castruccio の野心や武力革命を批判する人物が登場する。Castruccio の父が亡くなった後、彼に教育を与える Francesco de Guinigi である。かつて軍隊の指導者として名声を得た Guinigi は今では “a peasant who eats the bread his own hands have sown” (V. 25) となっていた。過去の栄光を捨てた彼は、恵み深い自然の光景を愛し、大地を耕す罪なき百姓たちを尊び、敬愛すべき謙虚さで自らの気高い精神と百姓たちのそれとを重ね合わせてはその質素な生活に人生の喜びを感じる人であった。彼の “a simple yet sublime morality” (V. 25) の教えはフランス啓蒙思想に現れた重農主義を思わせる。同時に Guinigi が掲げる理想的社会には、Godwin と Percy の革命論との類似が見られる。Guinigi は人間の人間に対する唯一の義務が社会の区別を取り除くことであると考えている。ここには、人間の精神に偏見を植え付ける社会に存在するあらゆる制度や階級の区別の撤廃を訴え、“to disengage the minds of men from prepossession”⁸ を社会革命の本来の目的とした Godwin の思想の投影が見られる。また Guinigi による征服者や軍隊に対する非難の描写は Percy の思想との類似を呈している。Guinigi は王を “the privileged murderers of the earth” (V. 26) と見なし、“knights hasting in brilliant array to deluge the fields with blood, and to destroy the beneficial hopes of the husbandman” (V. 25) を批判した。Percy は自らの政治的展望を詩の世界に融和しようとした *Queen Mab: A Philosophical Poem* (1813) の中で傲慢な君主や征服者を “The earthquakes of the human race” (Canto II, l.123) と呼び、“their victorious arms/Left not a soul to breathe./Oh! they were fiends!” (Canto II, ll.153-55) と表現している。

1 年間の共同生活の中で Guinigi は自らの理想を語ることで Castruccio に武勲や名声を追い求めることよりも百姓としての労働と知的快樂の生活の幸福を説こうとした。しかしながら、Guinigi が自らの理想を追求する姿を

Castruccio は “how futilely!” (V 26) と感じる。Castruccio は Guinigi に対して以下のように反論する。

I would rather, while alive, enter my tomb, than live unknown and unheard of. Is it not fame that makes men gods? Do not urge me to pass my days in indolence. (V 27)

Guinigi に深い愛情を抱いた Castruccio だが、しかし、皇帝党の政治的優越と名声への願望は彼に Guinigi の思想への共感を許さなかった。そして Guinigi の影響を離れるとすぐに、Castruccio の精神は “its wonted track” (V 29)、すなわち彼を暴君へと導く連鎖のものの軌道へと戻るのである。

人間の気質や習慣は彼を取り巻く環境から受けた影響の中で形成されるとする Godwin の必然論によると、そうした気質や習慣とは不意に取り除かれたり、変質させられたりすることはない。しかし一方で Godwin は “if ever they [man’s temper and habits] be reversed, it will not be accidentally, but in consequence of some strong reason persuading, or some extraordinary event modifying his mind.” (*PJ*. IV, chap. vii, p.341) と主張する。Guinigi の教えは、まだ純粹さを残している17歳の Castruccio の心に芽生えていた野心と派閥精神とを取り除く「強力な理由」とはなり得ず、彼の人格を形成する連鎖の軌道を変えることもなかった。Godwin と Percy の思想が投影された Guinigi が自らの美德をもって Castruccio を説得できなかったこと、「理想を語る者」以上にならなかったことは皮肉である。しかしながら、Guinigi の美德は Castruccio の野心と対照されることによって、彼の反英雄的資質を印象づけるものとして効果的に描かれている。

Guinigi の手を離れた後、Castruccio の前には彼を暴君へと導く3人の

人物が次々と現れる。Alberto Scoto はその頃フランスとフランドルの間で起こった戦いの中で前者を支持するイタリア軍を率いていた指導者であった。Scoto の下で Castruccio はその才覚を表し、騎士としての栄光を勝ち取るのであるが、読者はまもなく “Scoto’s was an evil school” (V 42) ということに気づく。この指導者によって Castruccio は “hypocrisy, and the wily arts of a hoary politician” (V 43) を身につける。“... nineteen is a dangerous age; and ill betides the youth who confides himself to a crafty instructor” (V 43) という語りは、Guinigi に比べ、指導者としての Scoto の影響がいかに大きいかを示している。Castruccio は Scoto の教える策略と狡猾によって軍を統率する力を皇帝党の権力の奪回に必要な不可欠なものとして認識する。

Scoto の次に登場する 2 人の指導者には Mary の政治的示唆がより明確に読み取れる。クレモナの皇帝派 Benedetto Pepi は Guinigi の思想とは対照的に “the world (in which) the rich rule, and the vulgar sink to their right station as slaves of the soil” (V 54) を熱望し、共和主義者たち、中でも共和都市国家フィレンツェを占める教皇派の共和主義者たちを徹底的に嫌悪する。後に Castruccio は “tyranny is a healthy tree” (V 55) と確信している Pepi の専制主義と反共和的思想に迎合し、冷徹な政策を用いてフィレンツェを侵略する暴君として、Pepi の主義思想の体现者となる。そして Castruccio の 3 人目の指導者は実在のミラノ公爵 Galeazzo Visconti である。彼によって狡猾な政策と “a prince” (V 125) になるための道徳観念を宿さない動機を与えられ、Castruccio は裏切りや残酷さを “venial faults” (V 68) とみなすようになる。

この指導者たちは “the evil genius who directs Castruccio’s pride and ambition into evil channels” (Williams 87) としての明確な役割を果たしている。Pepi と Visconti は徹底した反共和主義者であり、“(to) again bury Liberty” (V 54) を熱望する。Castruccio の反英雄的側面を

形成する Pepi や Visconti の専制主義と反共和的思想には Mary の19世紀初頭のヨーロッパの政治情勢に対する評価が示されている。Valperga の執筆当時、ヨーロッパの各地でフランス革命後の保守的反動政策と君主制に対する自由主義運動が巻き起こっていた。スペインでブルボン家の絶対君主制に対する自由主義運動である立憲革命が勃発し、また、Shelley 夫妻の滞在するイタリアでは独立国家として自由を確立しようとするナポリ暴動が起こる。こうした “the quiet revolutions” (MWS *Letters* 1 : 113) を Mary は熱心に支持していた。Pepi や Visconti の専制主義と反共和的思想の描写には、ウィーン体制に反発して起こった自由主義運動を弾圧しようとするヨーロッパ各国の保守主義者たちに対する Mary の批判が表れている。特にフランス革命前の旧体制を標榜する Pepi を Castruccio に取りついた “(a) dark angel” (Walling 63) として描写する Mary の手法に、革命の失敗を巧妙に利用し、革命が目指した自由・平等の精神を徹底的に退けようとする政治家たち、Talleyrand (1754-1838) や Metternich (1773-1859) への強い警戒心が読み取れる。

ある時、社会の区別を捨て去り、君主の存在を非難する Guinigi に対して Castruccio は “that in the present distracted state of mankind, it was better that one man should get the upper hand, to rule the rest” (V 26) を証明しようとする。これについて Walling は以下のように述べている。

In other words, what Mary presents through Castruccio is the fatal result of the obvious solution to “the present distracted state” of nineteenth-century Europe: the government of each nation by a powerful individual, who is ultimately responsible to no one but himself. (63)

Valperga を当時の政治体制に対する Mary の評価として読み解けば、読者

は小説で展開される中世の政治的構想の中に、フランス革命以降、1820年代までにヨーロッパが逆戻りしてしまっていた Ancien Régime に代わる民主主義の展望を模索しようとする Mary の意図をはっきりと認識することができる (Curran 110)。

世襲的派閥意識がもたらす弊害への危惧、“the Napoleonic danger” (Walling 71) としての軍事的野心と武力革命及びフランス革命後の政治体制における保守的専制主義に対する批判的分析が Castruccio の反英雄像の中に結合されている。必然の法則のもとで社会状況と教育環境が Castruccio を暴君へと導く過程を Mary は非常に詳細に描いているが、ここで重要であるのは、彼女が「環境の産物」である Castruccio を冷徹な暴君という反英雄的存在とすることによって、その生みの親である社会環境の悪に対する読者の認識を促していることである。こうしたやり方は社会悪こそが人間性の歪みを生み出すと説いた Godwin が小説において使う手法と同じである。皇帝党と教皇党の激しい対立の中、武力によってルッカの君主となった実在の Castruccio の再評価を通して、彼の暴君としての側面を引き出し、そこに Mary は自身の社会思想を描きこんでいるが、Castruccio の反英雄像には政治的出来事の批判的分析の他にもう1つの意図があると思われる。第Ⅱ章では、Castruccio の反英雄的側面を強調するヒロインに焦点を当て、これについて考察していくことにする。

Ⅱ 章

暴君 Castruccio と2人のヒロインとの葛藤

Valperga における Mary の政治思想の骨格はこれまで述べてきた Castruccio が暴君となる過程において明示的に示されている。Godwin の必然論を土台とし、闘争と暴君を生み出す根源として、Mary が問題視しているものがその過程には順序立てて組み込まれている。一方で、この男性中

心の政治闘争の中に登場する女性の存在を通して、また Castruccio と彼女たちとの主義思想の対比を通して、Mary は暗示的に暴君を生み出す別の要因を示している。それは「家庭的愛情」の犠牲であり、Mary の小説で繰り返しテーマとされるものである。これに加え、Valperga のヒロインは「男性中心の政治社会における危うい女性の立場」を表象し、Castruccio を含む政治家や策略家の反英雄的側面を裏付ける。この点を考察するために、まず Valperga のヒロインについて述べることにする。

この歴史小説にロマンスの要素を与える重要な人物として2人のヒロインが登場する。Euthanasia と Beatrice という架空の女性である。もともと *Castruccio, Prince of Lucca* とされていた小説のタイトルは、このヒロインたちを物語の枢要な存在であるとみなした Godwin の主張によって、Euthanasia の居城であり、彼女たちを守る砦である Valperga 城を主題としたものに改訂された (Curran 103)。政治闘争における Castruccio の道徳的墮落は、Mary による “perfectly original” (PBS *Letters* 2 : 354) なヒロインと彼との対立によって決定的なものとなる。

Mary の哲学的政治思想がより具現化されているのが彼女の創造した Euthanasia である。彼女のヒロイン像は Percy の手紙においてよくまとめられている。

The chief interest of the romance rests upon Euthanasia, his [Castruccio's] betrothed bride, whose love for him is only equaled by her enthusiasm for the liberty of the republic of Florence, which is in some sort her country, and for that of Italy, to which Castruccio is a devoted enemy. . . . This character is a masterpiece; and the key-stone of the drama, which is built up with admirable art, is the conflict between these passions and these principles. (PBS *Letters* 2:353-54)

Euthanasia には Percy の思想の色濃い影響を窺うことができる。Nitchie

によれば、Mary は Euthanasia の中に彼女が最も愛した Percy の性質を理想化して描きこんでいる。

Her [Euthanasia's] generosity, her gentleness, her love of beauty, her hatred of war, her belief that a corrupt clergy had falsified the teachings of Christ, her absorption in the classic authors — all are Shelleyan. (62)

Mary の義妹 Claire Clairmont も “Euthanasia is Shelley in female attire, and what a glorious being she is!”⁹ と Mary に手紙で書き送っている。Euthanasia の自由主義信奉や革命における暴力否定には Percy の理想を読み取ることができ、同時に Godwin の革命思想の影響を辿ることができる。

共和国フィレンツェの Euthanasia の父親は Castruccio が率いる皇帝党と対立する教皇党に属していたが、父親同士が党派を超えた友情で結ばれていたことから、彼らもまた幼い頃に堅い友情を誓い合っていた。2人が再会したとき、Castruccio はルッカの君主であり、一方両親を亡くした Euthanasia は相続した Valperga 城の城主となり、フィレンツェの教皇党の指導者的存在となっていた。彼らは互いに愛し合うようになるが、それぞれの政治的思想には決定的な違いがあった。Euthanasia は学識高い父 Antonio に教育され、自由主義への献身とイタリアの未来の統一と独立への信念を受け継いでいる。

she saw and marked the revolutions that had been, and the present seemed to her only a point of rest, from which time was to renew his flight, scattering change as he went; and, if her voice or act could mingle aught of good in these changes, this it was to which her imagination most ardently aspired. She was deeply penetrated by the acts and thoughts of those

men, who despised the spirit of party, and grasped the universe in their hopes of virtue and independence. . . Her young thoughts darted into futurity, to the hope of freedom for Italy, of revived learning and the reign of peace for all the world. (V 18-19)

Euthanasia が父から受けた教育は、理性の啓発によって、自然に不合理な秩序や区別を排除し、“content of mind, love, and benevolent feeling”

(V 82) に従って社会全体の幸福を実現しようとする楽観的展望を有するものであった。ここには Godwin の社会革命思想が色濃く反映されていることがわかる。人間の理性に絶対的信頼を置く Godwin は、必然の法則の下で理性の啓発が人間の心を普遍的慈善の精神 (“universal benevolence”) と正義へと導き、人は必然的に社会を構成する全体の利益 (“general good”) を目指すようになる主張する。また Godwin によれば、社会制度によって生じるあらゆる偏見から解放された理性的人間は無限に進歩するものであり、従って社会の進歩も無限である。その途上での革命行為とは常に人間の完全性への布石となる変革の一時期である。青春期に父から熱心な啓蒙教育を受けた “the daughter of an enlightened scholar”

(Williams 82) としての Euthanasia の原型は、幼い頃から Godwin の啓蒙主義的革命思想の中で教育され、彼の熱烈な信奉者であった Percy の妻となった Mary 自身である。

Castruccio を愛するようになった Euthanasia は彼を皇帝党と教皇党の血なまぐさい紛争からイタリアを救い、彼女が熱望する共和国再建を実現する英雄であると信じる。Castruccio はしかし、Euthanasia を強く愛する一方で彼女の “a pax Romana” への夢を共有することはなく、皇帝党による寡頭政治を望む。Guinigi の平和主義と同様に Euthanasia の自由思想は Castruccio の野心や名声を求める心を動かすことはできない。Euthanasia は次第に彼の “the craft of a grey-haired courtier, and . . .

the cruelty of a falling tyrant” (V 100) に気づき、フィレンツェの服従を求める暴君 Castruccio への愛と自らの政治的信条との葛藤に苦しむことになる。

Euthanasia の葛藤は、政治的野心と家庭的愛情の相容れない構図を表している。Euthanasia と Castruccio の関係の破綻と野心的 Castruccio の躍進は、「家庭的愛情の犠牲の上にのみ成立する政治社会での成功」を裏付けるものであり、これは歴史的事実としてルッカの君主となった Castruccio をアンチ・ヒーローとして再評価する際の重要な観点となる。

Valperga における、野心と利己主義を取り上げ、それらが要求する家庭的愛情の犠牲を描こうとする試みは、先の *Frankenstein* においても読み取ることができる。自ら温かい家庭に背を向け、家族の愛情を拒み、生命の創造主となる野望を追求し続けた Victor Frankenstein と同様に、Castruccio も自分が愛する者との家庭的幸福を切り捨て、権力、征服そして名声を求め続ける。Castruccio にとって、愛情は “the second feeling in his heart”, “the servant and thrall of his ambition” (V 183) であり、Castruccio のルッカ周辺都市の軍事侵略の成功の拡大と反比例するように、彼の Euthanasia への愛情は更に影響力を失っていくのである。Castruccio を指導した Pepi や Visconti は彼に愛情という余念を許さなかった。彼らが作り出す政治社会に浸透している冷酷で人間性を奪うような軍事的野心は Euthanasia が見せる家庭的愛情による幸福への希望の対極に位置する。

重要な出来事として、彼がかつて Euthanasia と愛を育んだ時に使っていた Valperga 城内に続く “the secret path” (V 204) を利用してフィレンツェ侵略に格好の地形にあるその城に侵入し、彼女を服従させようとした時に、彼は公私にわたる暴君となるのである。Valperga 城は “the repository of republican values” (Clemis 179) であると同時に、Euthanasia と Castruccio が婚約をした場所、Euthanasia が 2 人の幸福な生活を祈った

場所であった。権力や征服への野望に対して Euthanasia への愛情の優越を決して許さなかった Castruccio は策略と陰謀の世界で生きることになる。Mary による “the slow and gradual formation of a crafty and bloody Italian tyrant of the middle ages, out of an innocent, open-hearted, and deeply feeling youth” (*Blackwood's Magazine* 284) に お い て Euthanasia が見せる温かな家庭的幸福という価値観は “(a) moral standard” の役割を果たしており、Castruccio がそこから遠ざかるほどに彼の暴君としての道徳的墮落は決定的なものとなっていく。

これまでに述べてきたように、人間の性質や徳性を形成する場として社会と教育を重視した Godwin の思想を取り入れ、Mary は人間の精神に有害な影響を与える政治的派閥社会と狡猾な策略家や君主による指導を Castruccio の人格とそれに伴う彼の行為とを形成する「環境」とした。その結果、暴君の「段階的で漸次の構成」の核心には、すなわち Castruccio の行為の動機の背後には、その個人に責任を課すことのできない必然の力があることが示される。Mary は小説の中で幾度となく “individuals themselves are seldom responsible for their motivations because of the law of necessity” (Powers 83) という Godwin 思想を取り入れているが、Castruccio の場合も彼の道徳的墮落の不可避性がこの Godwin 思想によってよく説明されているように思われる。しかしながら、Euthanasia の愛に対する背信行為が彼を真の暴君とする Mary の描写には、必然の法則から少し離れて、人間性を貶めるものの最たるものが愛情の犠牲であるという彼女の思想を読み取ることができる。またそこからは、そもそも政治思想と家庭的愛情とが切り離された社会が専制と暴君の繁栄と存続を許すのではないかという疑念が窺えるのである。

人間を「完全性」から後退させるものは社会システムの悪であるという Godwin の思想を踏襲しながらも、Mary は家庭的愛情への背信が人間の不幸の根源であるとしている。これは Castruccio 同様に Euthanasia の選択

においても示されている。自らの政治的信条から、Euthanasia は Castruccio への愛情を抑え、フィレンツェの服従を求める彼と結ばれることを拒む。その結果 Castruccio は教皇党の300もの一家を追放し、Valperga 城を破壊する。Euthanasia には父の教育によって制御できない熱狂で自由を求める精神と判断力を駆使して個人ではなく皆の最大の幸福に献身することが自分の義務であるという信念があり、彼女がそれらを固持して Castruccio への強い愛情を抑えようとした結果、自身を含む多くの人々の不幸を生み出してしまふ。Castruccio とは異なり、家庭的幸福への崇高な希望を抱き続けながらも、自らの信条に妥協することができずに幸福を遠ざけるという点で、“Euthanasia is Castruccio’s double” (Smith 74) と言える。

しかしながら、父の啓蒙主義的教えに家庭的愛情を取り込もうとした Euthanasia の心の葛藤は、Mary と Godwin の思想の相違として重要である。人間全体の幸福の追求のためには理性の啓発が最も重要であるとした Godwin の革命論においては、個人的な家庭的愛情は度外視されていると言われる。理性にのみ絶対的信頼を置き、人間的感情が無視されているとの批判が Godwin の革命思想に付きまとう。William Hazlitt もそうした批評を出した1人であった。彼は “the boundless pursuit of universal benevolence” の中で Godwin が人間を “the gross and narrow ties of . . . private and local attachment” から切り離してしまったとし、以下のように述べる。

. . . he (Godwin) raised the standard of morality above the reach of humanity, and by directing virtue to the most airy and romantic heights, made her path dangerous, solitary, and impracticable. (*Lives of the Great Romantics III* 1:50)

Euthanasia の葛藤と愛情の犠牲が導く不幸の連鎖の描写は、道徳的規範と

しての家庭的愛情が人間の幸福の追求には不可欠であること、それを除外した革命思想は「危険で、孤独で、実行不可能」なものであることを示している。Mary は Godwin のようにどうすれば完全な社会が実現できるのかを提示することはない。ただ、人間の幸福を目指す革命が必要とするのは理性の啓発だけではないことが Euthanasia の挫折と Castruccio の道徳的墮落の進行の描写に示されている。それらは愛情への背信行為が導いた不幸の連鎖なのである。

Euthanasia の政治的敗北は Castruccio の武力革命の成功が歴史的事実である以上、不可避なものであるが、彼女の挫折には理想的革命の実現可能性に対する Mary の悲観的評価と社会革命に従事する女性の苦難が投影されている。父の教育の中で“independent and powerful”な“a queen in Valperga”(V 71)となった Euthanasia は先に述べたように Mary 自身の投影である。彼女の政治的理想は人々が“the mere word of command”に盲目的に従うことのない共和国であり、その中では彼らは“(to) discuss and regulate their own interests”を通して“energy and virtue”(V 78)を獲得する。Godwin の必然論における漸進主義的な政治社会の進歩を理想として掲げる Euthanasia は“a figure of unconstrained political optimism”(Clemit 180)として描かれ、彼女は武力によらない政策による自由と平和の確立を望む。父の教育が Euthanasia に信じ込ませた理念を作者が“(a) wild dream”(V 19)と描写しているように、後に完全に敗北する Euthanasia とフィレンツェの姿に、この楽観的思想に対する Mary の懐疑的態度が明確に表れている。

またここには、専制に立ち向かい、自由と共和制を求める1820年代のヨーロッパ各地での革命が、一時的に成果を収めることがあっても、結果的にことごとく失敗に終わったという現実と向き合う姿勢が見られる。専制に対する敗北による Euthanasia の心痛は Mary の感情そのものと言える。暴力対暴力の革命は新たな隷属と臆病とを生み出すに過ぎない。しかしながら、知

的啓発だけでは新しい秩序を生み出す創造の能力は育たないということが Euthanasia の敗北に込められた Mary の主張であるように思われる。

Euthanasia の敗北にはまた、男性中心の政治社会における女性の危うい立場が描かれている。これはもう 1 人のヒロイン Beatrice にも共通する点であるので、ここで彼女についても述べておきたい。前作の *Frankenstein* との決定的な違いとして、*Valperga* において女性ヒロインは社会的に独立した地位を確立している。Euthanasia が Valperga 城の独立した城主として自由と共和制を求めるフィレンツェの人々の指導的存在である一方、ボヘミアの Wilhelmina という異端信仰を持つ女性の娘であり、フェラーラの預言者である Beatrice も “(a) divine girl, *Ancilla Dei*. . . who is sent upon earth for the instruction and example of suffering humanity” (V 129) として民衆の厚い支持を受け、人々に対し影響力を持っている。フェラーラで出会った Beatrice と Castruccio は恋に落ちるが、Castruccio は彼女を簡単に捨ててしまい、Euthanasia と対立して暴君への道を着々と歩む。深く傷ついた Beatrice はローマへの巡礼の旅に出るが、謎の男によって連れ去られ、3 年間に亘る監禁虐待を受けて狂気に陥る。その男は聖職者 Tripalda であったことが後に判明する。なんとか監禁を逃れた彼女は、そのような状況においても Castruccio を愛し続けるが、最後は衰弱し、Castruccio ではなく、慈愛溢れる Euthanasia に看取られながら亡くなるのである。

たとえ異端であっても自らの信仰と愛に生きた Beatrice は、Euthanasia と同様に、圧制と戦争という男性社会に代わる社会を提示する女性である。彼女はフェラーラの人々の “lukewarm faith, careless selfishness, and a want of fervour in the just cause, that stamped them as the slaves of . . . tyrants” (V 137) を非難して説教を行うが、彼女の敬虔な思想は明らかに Castruccio の利己主義と専制に対する作者の非難と合致する。Euthanasia と同じように Beatrice は Castruccio の専制主義と相反

する社会的地位を確立しているが、彼女の破滅と死は彼女が “a second victim to his [Castruccio’s] magnetism of despotism” (Smith 72) であることを示している。

さらにフェラーラでのエピソードの1つは Beatrice が政治社会の策略の前に無力な存在であることを明確にする。異端審問官に逮捕された彼女は “the *Judgement of God*”¹⁰ の成功によって自分の力を確信し、Castruccio の属する皇帝党の勝利を予言する。しかし後にこの成功は Castruccio とフェラーラの司教の共謀によって裏書された皇帝党の策謀であったことが判明し、そのことが Beatrice をひどく苦しめる。この出来事が読者の目に Beatrice を “a pawn in the great game of masculine Italian politics” (Smith 72) として映すのである。

14世紀イタリアの男性中心的政治社会の中で破滅と死を迎える Euthanasia と Beatrice の姿には、19世紀における Mary 自身や母 Wollstonecraft の姿が重ねられている。Anne K. Mellor は以下のように主張している。

. . . it [Valperga] also emphasizes the inability of women, whether as adoring worshippers (like Beatrice) or active leaders (like Euthanasia), to influence political events or to translate an ethic of care — whether embodied in the domestic affections or in a political program of universal justice and peace — into historical reality. (210)

女性拡張論者、社会革命思想家としての Wollstonecraft が英国社会において指導的立場を獲得することができなかったこと、啓発された独立独行の女性という彼女の革新的ヴィジョンが保守主義者たちの悪評の対象となり、時代の受け皿を見つけることができなかったこと、こうした現実を客観的に評価する Mary の視点がこの2人のヒロインには見られるのである。そこに

はまた、Euthanasia の Godwin 的楽観的政治思想における派閥を超越した自由と共和制の確立と同様、彼女たちによる “a viable alternative social role for women” (Mellor 210) の確立は歴史上でも Mary の生きる時代においても敗北の運命にあるのではないかという思いが感じられる。

家庭的愛情を排除した男性的野心と利己主義から成る “the world of Machiavellian realpolitik” (Mellor 210) における狡猾と策略の前には「Valperga の女王」も「神の巫女」も無力である。“the victims of Castruccio’s despotism” (V 220) となってしまった2人は、周囲からの影響に脆くなり、自らの信条に最も反した行動をとってしまう。Euthanasia は Castruccio 失脚の策略に加担し、また Beatrice は監禁から逃れた後に会った “(a) *paterin*”¹¹の影響を受け、「至高の悪」を信じるようになってしまうのである。自らの信仰に純粹であった Beatrice が “the eternal and victorious influence of evil, which circulates like air about us, clinging to our flesh like a poisonous garment, eating into us, and destroying us” (V 242) について語る場面では、彼女が男性中心的社会の欺瞞と専制の中でいかにその性質を歪められてしまったのかわかる。Beatrice の「至高の悪」への傾倒と破滅の描写は *Blackwood’s* の評者に “It is impossible to read it . . . without sorrow, that any English lady should be capable of clothing such thoughts in such words” (284) と言わせたほどである。

Euthanasia と Beatrice は確かに暴君 Castruccio と専制主義社会の前に無力であり、敗北する運命にあるが、しかしながら、Euthanasia の葛藤の辛苦と Beatrice の破滅の不幸を暴君 Castruccio の道徳的墮落を裏付けるものとする事で、Mary は彼女たちの存在意義を堅固に提示している。それは彼女たちの専制に立ち向かう革命家としての姿と独立した女性指導者としての姿の中にある政治社会の支配的価値観、すなわち野心と利己主義への挑戦であり、自由と共和制へ向けての平和的前進の意義と手段の再評価の提案

であり、そして家庭的愛情という社会革命における新しい道徳的価値基準の確立である。Machiavelli による Castruccio の英雄的評価を打ち崩して彼を真のアンチ・ヒーローとした Euthanasia と Beatrice の存在と彼女たちの思想の中に、Mary が Godwin や Percy の社会革命思想の影響の中で創り出した彼女の価値観が見出せるのである。

結び

この物語は Euthanasia の死によって幕を閉じると判断することができる。Castruccio による教皇党に対する報復的残虐な政策が続く中で Euthanasia は彼に対する陰謀に加担する。その結果、Euthanasia は Castruccio によってシチリアに追放され、その途中、小船が沈み、彼女は海に姿を消すのである。第3巻の12章で Euthanasia の死が語られた後に“Conclusion”と題される章があり、Euthanasia の死後の Castruccio の武勲と繁栄、そして突然の死が“public histories alone”(V 323)の中で簡潔に語られる。物語の道徳的規範であったヒロイン Euthanasia を失った後に残るのは、人間的愛情のかけらもない闘争だけである。“Conclusion”においてただ強調されるのは軍事的野心の人間性を奪うような作用である。ここでは、武力革命と専制がもたらす人間性への破壊的影響に対する強い懸念と、平和と秩序の創造における「家庭的愛情」という道徳的規範の必要性が再度強調されていることが分かる。歴史的英雄の再評価を通して Mary は同時代の政治社会が抱える大きな問題を提示しているのである。

そして“Conclusion”よりも印象深い Euthanasia の死には、物語の中でたとえそれが地上において実現しなかったとしても、自由と共和制、そして家庭的美德の卓越を永久的な人間の価値観とする Mary の思想が表れている。19世紀の政治体制への批判と家庭的愛情による幸福の追求という自らの価値観を小説に描き出そうとする Mary の試みは、専制と社会悪の中で歪んでしまった Beatrice の心に再び人間の善を信じる心、“true religion”

を芽生えさせようとする Euthanasia の “I shall be in part fulfilling my task on the earth” (V 246) という思いと通じるところがある。その名の通り Euthanasia の死が穏やかであり、彼女に看取られた Beatrice の死もそうであったことを思うと、“Conclusion” の章を締めくくる Castruccio の墓碑銘にある “I lived, I sinned, I suffered” (V 326) という言葉は Mary の価値観を一層強く感じさせるメッセージのように思われる。

Notes

- 1 Niccolò Machiavelli (1469-1527) はイタリア、ルネサンス期の政治思想家であり、現実主義の古典として位置づけられる *Il Principe* (1532) を執筆した。
- 2 Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi (1773-1842) はスイスの歴史家・経済学者である。
- 3 *Valperga* の執筆に際して Mary が参考とした資料の数について、Percy は書簡の中で “fifty old books” (*PBS Letters* 2 : 245) と言及している。ここに挙げた Machiavelli と Sismondi の著作については、Mary による *Valperga* の “Preface” において、多くの資料の中でこれらが小説の主な資料とされたことが述べられている。特に Sismondi の著作に関して、“The reader may find a detail of his (Castruccio’s) real adventures in Sismondi’s delightful publication” と記されている。
- 4 “Preface” において、“The accounts of the Life of Castruccio known in England, are generally taken from Machiavelli’s romance concerning this chief.” と記されている。
- 5 “Review of *Valperga*,” *Blackwood’s Edinburgh Magazine*, 13 (March 1823), p.283.
- 6 William Godwin, *Enquiry Concerning Political Justice, and Its Influence on Morals and Happiness* (1798) ed. Isaac Kramnick (London: Penguin Books, 1985) p.97. 以下、本稿中の *Political Justice* からの引用は全てこの版に拠る。
- 7 Mary Shelley, *Valperga; or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* (1823) ed. Nora Crook (London: William Pickering, 1996) p.11. 以下、本稿中の *Valperga* からの引用は全てこの版に拠る。

- 8 これは Godwin の小説 *Caleb Williams* (1794) の最初の批評家の 1 人が政府基金刊行物 *British Critic* に寄せた評論に対する Godwin の返答の一部である。
British Critic, 6 (July 1795), p.94.
- 9 Mrs. Julian Marshall の *The Life & Letters of Mary Wollstonecraft Shelley* (London: Richard Bentley & Son, 1889) vol.2, pp. 265-6 において引用されている。
- 10 異端信仰で告発された者の有罪か無罪かを神に問う儀式であり、その者に炎の中の鋤の刃の上を裸足で歩かせるというもの。
- 11 カタリ派として知られるマニ教の一派 (the Paterini) に属する教徒。注釈によると、Sismondi は彼らの教義が “that the creator of the material universe is an evil spirit; that man is a fallen angel; that the individual is free to investigate religious questions” であると言及している (V 234)。

Works Cited

- Bennet, Betty T. Ed. *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. 3vols. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1980-88.
- Clemit, Pamela. *The Godwinian Novel: The Rational Fictions of Godwin, Brockden Brown, Mary Shelley*. Oxford: Clarendon Press, 1993.
- . Ed. *Lives of the Great Romantics III: Godwin, Wollstonecraft & Mary Shelley by their Contemporaries*. London: Pickering & Chatto, 1999.
- Curran, Stuart. “Valperga” in Esther Schor (ed. by Esther Schor), *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Godwin, William. *Enquiry Concerning Political Justice, and Its Influence on Morals and Happiness* (1798). Ed. Isaac Kramnick. London: Penguin Books, 1985.
- Grylls, R. Glynn. *Mary Shelley: A Biography*. London: Oxford University Press, 1938.
- Jones, Frederick L. Ed. *The Letters of Percy Bysshe Shelley*, 2vols. Oxford: Oxford University Press, 1964.
- Marshall, Mrs. Julian. *The Life and Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. 2 vols. London: Richard Bentley & Son, 1889.
- Mellor, Anne K.. *Mary Shelley: Her Life, Her Fiction, Her Monsters*. New York: Methuen, 1988.
- Nitchie, Elizabeth. *Mary Shelley: Author of Frankenstein*. New Brunswick:

- Rutgers University Press, 1953.
- Powers, Katherine Richardson. *The Influence of William Godwin on the Novels of Mary Shelley*. New York: Arno Press, 1980.
- Shelley, Mary. *Valperga; or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* (1823). Ed. Nora Crook. London: William Pickering, 1996.
- . *Lives of the Most Eminent Literary and Scientific Men of Italy, Spain, and Portugal*. 3vols. London: Longman, Brown, Green, and Longmans, 1835-37.
- Smith, Johanna M. *Mary Shelley*. New York: Twayne Publishers, Inc., 1996.
- Walling, William A. *Mary Shelley*. New York: Twayne Publishers, Inc., 1972.
- Williams, John. *Mary Shelley: A Literary Life*. Houndmills: Macmillan Press, 2000.